「おさしづ」語句の探求（6）

『天理教教典』における「道」④

おやさと研究所助教
澤井　治郎　*Jiro Sawai*

前回、『天理教教典』の後篇は信仰篇ともいわれるが、その第6、7章では「信心」、第8章では「信仰」、第9、10章では「道」という順序で陽気ぐらしへの歩みが説かれていることを述べた。そして、「信心」は「道の子の心がけ」、「信仰」については、「道の子の歩み」というように、「信心」や「信仰」についても、「道」という言葉を用いて説明されている。この「道の子」というように、「道」という言葉自体に特有の意味を込めた使い方は後篇になって出てくるものである。それでは、その「道」という言葉にはどういう意味が含まれているのであろうか。ここでは、第9、10章における用例を挙げながら、その内容を確認することにしたい。

よふぼくの進む道

第9章の章名は「よふぼく」であるが、ここで最初の「道」の用例は、「親神の類ない陽気普請に、よふぼくとして引き寄せられるのは、実に、道の子の幸である」（85頁）というものである。単にこの章のテーマが「よふぼく」であるというだけでなく、信仰篇である後篇においては、信心の道に心を正し、信仰の歩みを進めるところに、「親神の類ない陽気普請に、よふぼくとして引き寄せられる」順序があると解することができる。そこに「道の子の幸」があるといわれる。

その生き方は、「身上を病んで苦しむ者に、さづけを取り次ぎ、せんすべない事情に悩む者に、教の理を取り次ぐのが、よふぼくの進む道である。……その人の心を、しんからたすけさせて貰うのである」（88頁）と具体的に記されている。これを、一言で「この道は、心だすけの道である」（89頁）と明瞭に示されている。

このことは、ほかにも、「一すじにたすけの道に進むなら、何人でも、親神の守護を鮮かに頂くことが出来る」（90頁）、あるいは、「たすけの道にいそしむ日々は、晴れやかな喜びに包まれ、湧き上がる楽しさに満たされる」（92頁）などと記されており、「よふぼくの進む道」は「たすけの道」であることが強調して説かれている。

こうして見てくると、「道を求めるものが、次第に相寄り相集つて、教会名称の理が許される」（90頁）という言葉は、単に、たすかりを求める人々が集まることによって、というよりは、「たすけの道」を歩む人々が集まって、教会が許されるという意味に解される。

陽気ぐらしへ向かう道

第10章の章名が「陽気ぐらし」であることから明らかなように、この「たすけの道」は陽気ぐらしへ向かう道である。『天理教教典』に引用されている、

> 皆んな勇ましてこそ、真の陽気という。めん〳〵楽しんで、後々の者苦しますようでは、ほんとの陽気とは言えん。（明治30年12月11日）

という「おさしづ」の言葉（93頁）が指し示すように、その道はめいめいが陽気であればよいというものではない。また、たすけを思い念じて通っているとしても、それが自分本位なものであってはならない。そこで、「人皆、相互いに一つの道の理に心を合せ、互立て合い扶け合うてこそ、陽気に勇んで生活して行ける」（94頁）と説かれている。陽気に勇んだ生活こそが、この道の目標であるが、それには、各自が「一つの道の理」に心を合せることが重要だという。一人ひとりの信心、信仰の歩みは「一つの道の理」に心を合せることで「陽気ぐらし」に至る。「道」という言葉によって、各自各自の「たすけの道」は一つに合わさり、「たのもしい道」が現れると説かれている。

それは、人間の智慧を出し合って見い出した道でもなければ、人間の力で作り上げるものでもない。教祖を通して明かされた「親神の道」であり、教祖の「ひながたの道」によって示されたものであると説かれている（96～97頁）。

陽気ぐらしへ向かうたすけ一条の道

中山正善『天理教教典講話』（改訂版、天理教道友社、1979年、131頁）に、

> 陽気ぐらしの結論は、第九十八頁の二行目で終わっております。第九十八頁の三行目からは、前篇後篇すべてにわたっての総括りであります。

と記されている。その「総括り」から、改めて『天理教教典』において「道」によって説かれたところを簡潔にまとめると次のようになる。

前篇は「教理篇」といわれているが、親神は、教祖を通して、「専らたすけ一条の道を宣べ」られたと記されている。すなわち、親神が教祖を通して説かれた「教」は、一言で、「たすけ一条の道」であるということができる（98～99頁）。

後篇は「信仰篇」といわれ、人間の進み方、歩みについて書かれているが、「かくして進む成人の道すがら」は陽気ぐらしに向かうものであり、「これぞ、この道の目標である」と端的に記される。最後の一文では、道の子は「たすけの道に弥進む」と宣言されている。

したがって、この教えは「たすけ一条の道」であり、その信仰は「たすけの道」である。その前者については、教祖が口に筆に、そして、「ひながた」をもって教えられ、後者については、教祖が「ひながたの道」として手本をのこされ、導かれているということができる。

『天理教教典』の後篇において、「信心」そして「信仰」、そしてさらに「道」と説き分けられている。最後のまとめにあるように、「この道の目標」は陽気ぐらしである。すなわち、天理教の信仰は、単に個人が“信じ仰ぐ”ということにはおさまらず、陽気な“くらし（生活）”全般を指しているのである。このところから、最終的に、陽気ぐらしへと至る歩みや、その生き方が、「道」という言葉によって指し示されていると読むことができる。

こうした原典の手引き書でもある『天理教教典』の読みを踏まえながら、これから「おさしづ」の用例について探求することにしたい。